

アフリカの文化

西洋及び東洋の文化との比較

サンガ・N・カザディ

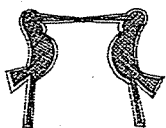
ご紹介いただきましたように、ザイル国立キンシャサ大学のサンガと申します。

日本に来てから九年くらいたちました。一番最初は大阪外国語大学で六カ月間、日本語を勉強して、そして京都大学で六年間、大学院生として熱帯地域の気候変動と環境問題の研究を続けてきました。その後二年間、名古屋国際センターの民間大使として、アフリカのことを全園に紹介することが出来ました。それで去年十月からこの創価大学アフリカ研究センターの研究員になりました。今日はアフリカの文化を、西洋及び東洋との文化と

比較し、皆さんに紹介したいと思います。

1. はじめに

九年前、日本に来たときに、いくつかのことでびっくりしたことがあります。例えば世界地図を見たら、日本はアジアの国だということを知っていましたが、日本では、特に政治家の発言、話によると、日本は西洋的な国だということになります。その西洋的な国ということとは、どの意味か今もよく理解できません。たぶん経済的な意味ではないでしょうか？ 今日の話では、日本は西



洋の国の立場ではなく、東洋の国として話をしたいと思っています。

もう一つあります。アフリカには文化がないと思われるという事です。この話はいろんな学者の発表の中でも何回も聞きました。

例えばアフリカに何か文化的なものがあるとすれば、アフリカ人自身が自ら作ったものではなくて、ヨーロッパから借りてきたものではないかとすぐ思われます。一般の人たちから、このような話を聞くことも珍しくありません。以前、私は、滋賀県のある地域に講演に行きました。講演の後、ある婦人が私のところまで来て「サンガさん日本に来てよかったねえ」と言われました。なぜよかったのかとびつくりして聞いたら「アフリカには文化がないので、日本にいる間日本の文化をよく吸収してアフリカに帰ったらアフリカで困っているアフリカ人に、この日本のすばらしい文化を教えたら彼らも幸せになるでしょう」という答えでした。それを聞いてとても悲しかったのです。

「アフリカには文化があるかどうか、あまりここで話

をする必要ありませんが、私が日本にやってきたのは

日本の文化を吸収するためではなくて、現在の日本の近代化の経験から学び、私達のアフリカ社会に役に立ちそうなよいものをピックアップしてもって行きたい」と答えました。彼女はどれくらいこの話が分かったかよく知りません。はっきり言うと、アフリカでは今、みんな困っているのはそれは「アフリカには文化がない」という考えで、そういう人は、きつとこの会場にもたくさんいると思います。

現在、日本からみると世界の文化は大きく二つに分けられる。西洋文化と東洋文化です。でも深くみると西洋の文化の中でもそれぞれ地域によって分類がある。例えばフランスの文化、ノルウェーの文化、イギリスの文化、ギリシャの文化、アメリカの文化等々です。東洋の方も様々です。日本、中国、インド、東南アジア……。

私にとって、この分けかたは不十分だと思います。例えばイスラム教の世界はどっちに入るでしょうか？完全に西洋的でもないし、東洋的でもないのです。同じ東南アジアであるキリスト教的なフィリピン、仏教的なタ

イと回教的なマレーシアでは文化が結構違います。です

から私にとって、それぞれのいわゆる文化を支える宗教的な考え (religious thought) というものが、とても大事だと思います。これはユディオ・クリスチャニズム (Judeo-Christianism) であり、イスラム (Islam) であり、儒教・仏教 (confucio-buddhism) であると思います。

現在言われている東洋、西洋文化というのは、新しく入ってきた宗教的な哲学と昔その地域にあった伝統的な信仰の長い時間をかけて混合されてきたものです。例えばヨーロッパのキリスト教というのは、昔のヨーロッパ人の異教信仰 (paganism) と言われる伝統的な信仰が二十世紀をかけてキリスト教化されてきたものです。現在の日本の文化も同じように仏教化されてきたものだと言えると思います。

ではアフリカはどっちになるのでしょうか？西洋的な文化か、東洋的な文化か、それとも回教の仲間でしょうか？アフリカの文化、宗教はどのものですか？このいくつかの質問に答えてみるために、アフリカ、特にサハラ以南のアフリカの伝統的な文化を紹介しながら、こ

の後述べたいと思います。

2. 歴史的背景

アフリカはヨーロッパ、アジアとの文化的、宗教的な交流関係はずっと昔からありました。記録にあるものによると、一番最初はイスラエルとファラオ時代のエジプトの関係。ソロモン時代には、エチオピアの女王がイスラエルを訪問したということから現在のエチオピアの Falashah (Jews) が出来ました。

キリスト教の早い時代に (三世紀まで)、北アフリカはローマと同じペースでキリスト化されました。例えば Carthago 出身の聖 Augustine は、キリスト教の有名な学者であり、指導者でもありました。

その後はイスラム教の登場です。七世紀から東、北と西アフリカが暴力的に回教化されました。北の方は、エジプトからモロッコまで完全にイスラム化が出来て、東と西の方は、アフリカ的な伝統のベースの上で、イスラム教が混合して入ってきました。

十五世紀までヴァスコ・ダ・ガマが喜望峰を回るまで

には、キリスト教は赤道を渡ることが出来ませんでした。そのあとから、ポルトガル人の影響で平和的にアンゴラ海岸、コンゴ王国に新しいキリスト教の信者が出来ました。でもこの影響は長続き出来なかったのです。奴隷売買のために。

四世紀間にわたって、このひどい商売のためにヨーロッパ人、アラビア人が徹底的にアフリカの社会、文化構造を壊してしまいました。同じヨーロッパ人の気が十九世紀に変わるまで。このときから厳しい暴力的な植民地化と同時に、“伝道活動 (missionary activities)” が“かわいそうなアフリカの野蛮人”のために始まりました。宗教と政府の区別しにくい時代でした。例えば、その時代のコンゴには、キリスト教組織は宗教的組織化された政府になりました。教会は自分の学校、病院に政府からの運営予算ももらっていました。アフリカ人が西洋化されやすい“ブレインウォッシング”という仕事だったと思います。

宗教の力で和らげられないものは、政府の力で曲げる。この政府—宗教関係はアフリカが独立になっても、まだそのまま残っている国はたくさんあります。この歴史的

な観点から現在のアフリカの社会、文化、経済構造を見ておかないと、いろいろな状況の見方が違ってしまふと思います。このようにアフリカに持つてこられた表面的な殻をむくと、現在のアフリカ人は（特にサハラ以南）大抵自分の昔の伝統的な信仰をやり続けてきました。日常生活からいくつかの例を取り上げて、これを分析しましょう。

3. アフリカはアニミズムですか

西洋の文化では、全ての人々は一人の全能 (almighty) の「神様」(God) を信じています。この神様はただ一人、嫉妬深く、全ての物の創造者で、みんなの保護者です。彼がこのすばらしい自然、地球、宇宙を人間に与えてくれました。でも嫉妬深い、だからよく厳しく人間の間違いを懲らしめます。聖書に書かれてあるイスラエルの歴史は一つの例であります。人間一人一人が死ぬときに、いい人であったなら神様の側に天国へ行けます。悪い人であったならば、同じ神様の厳しい裁判で永遠に苦しみの地獄に捨てられます。

す。

アフリカの方はどうですか？

まず、アフリカでは聖職組織は伝統的な思想はないと思います。書かれた基盤になる教えもありません。宗教と日常生活が一つになっています。家族の長令や、国の王様の元で、その家族や国に対する宗教的な活動が行われます。先祖に向かってのお祈り、供養……。家族からいなくなった人々がその家族の「神」になって、家族を守ってくれます。それだけではないのです。自然の力、出来事でさえも神になります。どのものにも、この自然の力があって、私達を悪いものから守ってくれるという考え方です。

この神様の教えはちゃんと聖書に書かれています。この教えを伝え、守るために、ちゃんとした宗教的な組織があります。ローマ法王、僧正、僧職、そして信者達。これは地域によって少し違うけれども、構造は西、東ヨーロッパ、アメリカ、オーストラリア、ソ連、イスラエルであろうと、ほとんど同じです。この教えが西洋文化の基盤になっているのは明らかな事実です。

東洋の文化では、神は様々です。神にされた先祖様、自然の力、動物……。これらは、お寺に奉られて、皆さんのお祈りを受けて、幸福を与える。一日は自家の仏壇や祭壇の前に始まります。いい一日になるようにというお願いです。仏教ではお釈迦様のいろいろな教えを中心とした宗派があるが、それぞれの経文の解釈が信心の基盤になっています。でも、例えば日本の神道というものはどの教えが基盤になっているのか、今も私はよくわかりません。日本ではこの仏教と神道、両方共に教義の体系を持ち、聖職者の構造がちゃんとありますが、信者の方はいくつかのはっきりしている信仰以外、不正確な形になっています。結婚は神社で、お葬式はお寺で行いま

います。「あの洪滞が私の神だった」。

西洋人がこのような話を聞くと、とても理解しにくいと思います。「アフリカ人はどんな物でも“神様”として拝んでいる」と言ってしまう。アフリカ人の宗教は「精霊信仰(アニミズム)」だということになりました。結局、西洋人が言っている「神様」とアフリカ人の「神」の概念から人間との関係までも余りにも違います。アフリカでは「神」というものは命を助けてくれる自然の原因、幸福を運んでくれる自然の力であり、人間の創造者ではないのです。このところでは、東洋の概念にととても似ていると思います。

アフリカにキリスト教を広げるために、西洋人が聖書をアフリカの様々な言葉に翻訳しました。とても難しい仕事でした。特に「神様」をどの様に現地の言葉で呼んだらいいのか？例えばザイルのルバ・カサイ人は様々の伝統的な神を“*nvidi*”と呼びます。キリスト教の学者は彼らの“*God*”を“*Mvidi Mukulu*”と名付けました。意味は“一番偉い神”。大文字で書くべきです！

同じザイルでシャバ州のルバ人は“*vitie*”という

言葉に様々な意味があります。神、魔法使い、幻の力を持つている人、自然現象。挨拶の時も相手を“*vitie*”と呼ぶことが丁寧な普通の言葉です。これも「神様」は“*vitie*”、大文字になりました。文字を知らないアフリカ人はこの印刷的な区別で(大文字)どの様に彼らがずっと拝んで来た“*vitie*達”と新しくできた大文字の“*Vitie*”の違いがわかったでしょうか？

もう一つ混乱がありました。アフリカの西海岸のアンゴラ、ザイル、コンゴでは、キリスト教の「神様」は“ザンビ(*Nzambi*)”と言います。同じザイルの中部に住んでいるルバ・カサイ人は、学校または教会を“ザンビ(*nzambi*)”と呼びます。アフリカの中央から東まで(ケニア、タンザニア)、“ザンビ(*zambi*)”、と言う言葉は“罪”という意味です！

日本にも同じことが行われていませんか？キリスト教の“*God*”は「神様」であり、伝統的な“*gods*”は「神」であります。私にとっては言葉というものは、ある文化の鏡だと思っています。ある文化のちゃんとした概念の言葉に、違う文化の概念を無理やりに導入させることが出来

にくいのです。お互いの大混乱を生む知識的な曲芸だと思っています。

4. 輪廻

生命と言うものはどの様にとらえられているのか？もちろんここは科学的な定義をする場ではありません。アフリカ人の日常生活の中での考え方を説明したいと思っています。

さきに述べましたように、西洋の文化では、いなくなった人たちが、すぐ厳しい神様の前で無慈悲な裁判を受けます。よい生活であった人はすぐ天国へ行くことになり、悪い人の靈魂(Soul)は永遠に地獄で苦しみます。ちよつと罪の黒点のある人たちは、しばらく煉獄(Purgatory)でそれを後悔し、その後、天国へ行くことになっていきます。

東洋の方は、この西洋的な天国と地獄の概念は昔からなかったと思います。死んだら人間は生まれ変わってくる。前の人生の「業」(karma)によって、同じいい人生に生まれてくるし、それとも動物、植物として命が変わり

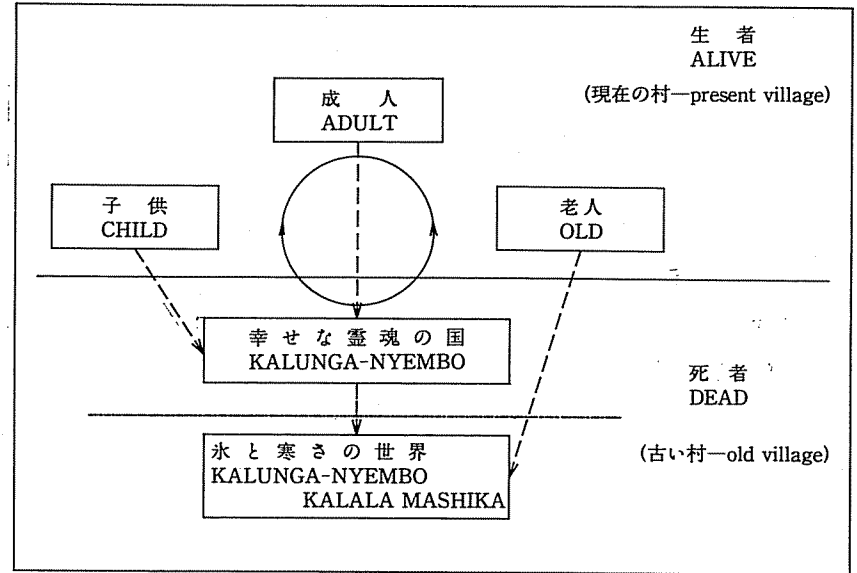
ます。でも命は永遠に形を変えてずっとあるものだと思います。前の人生が豚であった者が、いま人間として、後の人生では、松か桜の木にもなれます。これが輪廻というものです。でもどこで生まれてくるか、どの形で生まれてくるかは、今の人生の人々は分かりません。

アフリカの考え方は、この東洋の輪廻というものにとっても似ています。生命というものは終わらないものだと考えられています。人間は生まれて、大きくなって、年をとって、死んでしまいます。また「人間として」新しく赤ちゃんとして生まれてくる。人間は動物や植物などには変われないものです。この輪廻がアフリカの生命・社会・哲学の全ての基盤だと思っています。

どこで生まれてくるかという、自分の親戚や自分の一番いい友達の家です。これの調べ方も様々です。例えば、“*Vitie*”(易者)の所か、家族でみられた夢の中からなどで分かります。赤ちゃんとして生まれてくる親戚の前の人生の名前を赤ちゃんに与えます。自分の前の人生の業ももってくるから、よくこんな話が聞かれます。

「この子は前の人生と同じだね！」

図1



このようなことで、家族というものは、ただお父さんとお母さんと彼らの子供ではなくて、彼らと死んでいる親戚と生きている親戚で成り立っています。特に家族というものは、いなくなった親戚や友人が生まれ変わる場になります。たくさんの子供が生まれるというのは、たくさんのお親戚に、いい家族として選ばれたという幸せとプライドの高い事実であります。子供のない家族は不幸で、親戚に優しくないと最高の証拠です。この文脈で家族というものは、社会の中でどれくらい大事なものが想像できます。そして、ただ子供を減らすために「家族計画」(family planning)の話を選んでくる西洋人の専門家のメッセージが通じないのは当然だと思います。家族も社会もすべて世代、年齢の元で成り立っています。大家族(cow)の長令がその大家族の僧職として、家族のため、いなくなった親戚に供養する大責任者です。彼は家族の中で死んだ人に一番近い人であることです。長令は経験と知恵も豊富だと思われ、家族の仲裁人を勤めます。村の他の大家族の長令と一緒に、村の仲裁人としていろいろな問題を解決する役割を持っています。

いなくなった人たちはみんな「神」になるわけではないのです。私のルバ族では、生活のきれいで優しかった人は幸せな靈魂の国「Kalunga-nyembo」と呼ばれる世界に行つて、すぐ生まれてくると思われています。自分の力で。この「Kalunga-nyembo」というところは死んだ人が埋められている「Old Village」にあります。そこで生きている人々と同じ様な生活をしています。とても生活の悪かった人たちは「Kalunga-nyembo-kalala mashika」(氷の寒さの世界)に落ちて、二度ともう生まれ変わってこないのです。社会から自然に悪い人物が切り捨てられます(図1)。

よっぽど悪いことは何かというと、まず生命を奪うもの、嘘つき、泥棒、暗殺者。人に嘘をつく、人の物をとる、特に人の生命をとることが一番大きい罪です。ルバ族では殺人事件は珍しいものです。ひどい場合では暗殺者が死んでしまうと、普通に土葬されず、火葬されることもあります。完全に生まれ変わってこないように。九年前、家内が日本にきたときとても病気で困っていました。でも彼女の一番心配だったのは死ぬことではな

くて、日本で死んだら悪い人たちと同じように、火葬されるということだったのです!

西洋文化では、生まれ変わるという考え方はないので。珍しい場合、イエスキリストみたいに「蘇生する」(resurrection)という概念しかないのです。というのは、死ぬ前の同じ人間が、同じからだ、同じ人生で、もう一度生きるようになること。これは東洋的やアフリカ的な輪廻の概念とまったく違う物であることはここで明らかになりました。東洋のアプローチとアフリカの考えの違うところも分かるようになったと思います。

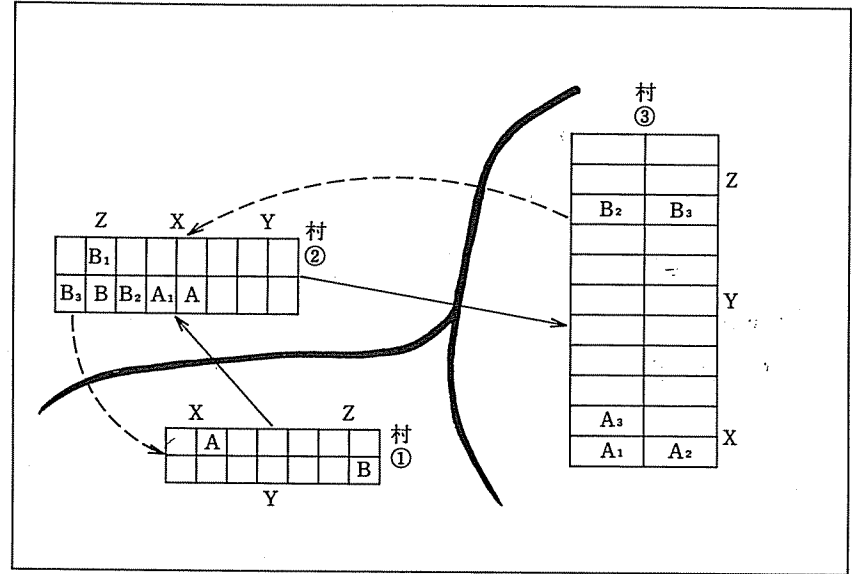
5. 社会、自然環境

この輪廻の概念を基盤として、ほとんど全ての人間関係、町作り、活動生活に当たるものが決められます。もう一度シャバ州のルバ族の例を取り上げてみましょう。

社会生活

図2はサバンナの地域に住むルバ人の一つの村の絵です。いくつかの大家族(cow—一族)——ここでX, Y, Zとする——が一緒に村を作ります。ここでは全ての大人

図2



になっている(十八歳以上の)男の人に土地が与えられ、自分の家を作って、自分と自分の奥さんと子供達と暮らします。X一族のA家族とZ一族のB家族のことを時間の流れの中で調べてみましょう。

最初は川の側の「村①」のようにみんな暮らします。時間がたつていくと、それぞれの子供達が大きくなり、それとも村が古くなったりすると、「村①」から全員引越すことになります。特に時間がたつていくと村中木がいっぱいできて、森となって住みにくくなるので、木を切るよりも(木は大事な財産ですから)人が引越すことになります。

新しい村「村②」の場所を決めるときは、それぞれの家族の一番いい場所を選び、その中で大人になった男の人と平等に土地を分け合います。今回はAさんの隣にAさんの長男のA₁さんの家が作られます。Z一族のBさんには三人の男の子がいるので、彼らにそれぞれ土地が与えられます。この村でいなくなっていく人々は、古い村「村①」の自分の土地か、自分のお父さんの土地か、自分の一族の土地、どこでもいいですから、そこに埋め

られます。「村①」にある一族の大事な財産(椰子の木、マンゴーの木、コーヒーの木、アボカド、パイナップルなど)は、いなくなった親戚に守られ、「村②」の一族の親戚が平等に使えます。

このような生活が二十年、三十年と続きます。「村②」が森になって、若者が大きくなって、新しい「村③」を作るまで。この新しい村の分担するときは「村①」から「村②」の時と同じで、引越してから、「村②」が墓場になって、「村①」は完全な森になってしまします。サバンナ地域に住むルバ人は彼らの生活から森林が作られます。ほとんど全ての森は昔の村だったので！

死

この考え方では、図2の古い村はただ墓場ではなくて、「神」になって親戚が住んでいるところ、そこからもう一度生まれ変わってくる時を待つ。輪廻の原点と思ってもいいと思います。この古い村から「Kalunga-nyenbo」として靈魂が出て赤ちゃんになって、そして大人になります。年をとつてしまうと自然に死ぬことになります。もう一度繰り返されます。

このように、ルバ人の文化では、老人の死はそんなに悲しいものではないのです。自然なものだと思われれます。またすぐ子供として生まれてくるのです。赤ちゃんの死はおかしいと思われれます。両親の仲がよくないという証拠で、生まれてきた先祖を思っていたようにお迎えが出来なかったことと考えられます。でも、若い人が亡くなると大きな問題になります。子供の時、死ねなかった人はどうしても老人で死ぬはずですので、若い人の死は魔法をかけられたとしか考えられません。事故、病気などの原因でも魔法の影響でそのようになったと思われれます。よく一族の分断の原因にもなります。

先ほど述べましたように、よっぽど悪い生活、性格の人たちは「Kalunga-nyenbo-kalala mashika」に落ちて、そこで寒くて、氷の世界の中で、永遠にこの生きている社会に戻ってこないものになります。

人と人の関係

この社会構造の中で、それぞれの役割が年齢の上で決められています。中心になっているのは家庭を持っている大人の人们。彼らの力で、彼らの働きで、一族の全

体の生活がうまくいっています。ほとんどみんな農業をやっています。土地は幾らでも無料で使えるのです。

一日は朝早く始まります。主人と奥さんと大きくなった子供達（十三歳以上、学校へ行かない子供なら）と一緒に十二時まで一生懸命働きます。ほとんど休みなしで。その後、奥さん達が村に戻って、食事の準備をします。男の人達は狩りや、魚釣りにいきます。夜と明日の食事のために。かえってくるときは食事の準備が出来て、奥さん達が外で、一族のために用意します。それぞれの家族で、隠れて「家で食べるのは一番恥ずかしいこと」と思われています。

ほとんど全ての生活は外で行います。涼しいところで。家は料理する、物を置くところ、それと寝るところであります。暖かい、開いた心でみんな生活しています。

でも、本当に生活の中心になっているのは、老人達です。若者は彼らの意見を聞き、相談して、行動する。年寄りには、もう農業する力はありませんので、昼間に村に残って、村の全体的なことを世話する。裁判、問題を解決する、それと子供達の教育、しつけ。老人は知恵と経

ではなくて、生活が出来るためです。この意味でたくさん作る必要性もなくなってしまう。特に、このルバ人の国では、雨と水と自然の豊かな国であって、半年で（雨季の間だけ）一年分の農産物を作る。特別の機械とか肥料はいりません。それでずっと昔から豊かな社会生活が成り立っていたのです。

農業はサバンナ地域（森のないところ）で行います。ときどき、特別の農産物を作るため、森を切り倒して、焼き畑農業が行われます。同じ所を一年、二年使って、その後おいておきますと、また森になります。

さっきも明らかにしましたように、人たちの生活から森が作られます。でもこの森には親戚の靈魂が住んでいるという意味もあるので、すぐ焼き畑農業に使えるわけではないのです。例えば図1の「村③」に住む人々は絶対「村②」や「村①」の木を切らないのです。まだ近い（知っている）親戚が住んでいるところですので、新しい「村④」の時くらい、完全な森になった「村①」が焼き畑農業に使われるようになります！これが本当の人間と自然との共存ではないでしょうか！

験の塊と思われ、この役割は彼らに一番合う仕事であります。「一人の年寄りが死ぬと、一つの図書館が火事ではなくなった」とアフリカでは言われます。

子供達の教育は社会教育であります。どの様にこの社会に役に立つ大人にするか？というメインテーマの教育です。全ての大人の人は子供達に向けて、同じ責任を持って、どの子供にもしつけする義務があります。昔の諺はこう言います。「生まれる前には、子供はお母さんの物で、生まれてから、社会の物になります」。社会の中で、社会のための教育、しつけをされて大人になる日の準備として。

一生懸命物を作って、でもみんな平等に分け合う。少ないときでも。自分のためだけではないのです。生活が出来分だけを作る、そのときそのときの経済でした。このところは近代化のせいによく変わってきました、特にアフリカの都会の中で。

人と自然の関係

ここまで明らかにしましたように、アフリカでは伝統的な考え方によって、利益のために物を作る、働くの

この共存意識を明らかにする、もう一つのことがあります。ほとんどアフリカの全ての言葉に“be”動詞はあっても、“have”動詞はないという事です。

“Have, (əv) の代わりに “to be with, (təw)と一緒にいる”が使われています。アフリカ人は“私はペンを持っている”でなく、“私はペンという”といっています！どっちが持ち主（上）、どっちが持たれているもの（下）、上下関係ではなくて、横の関係であることが明らかです。人間も、動物も、植物も全ての物が共存しています。みんな同じです。お互い守り合いながら生きていくしかないという生活の哲学であります。

6. まとめ

このいくつかの点から分かってきたのは、アフリカの文化と西洋の文化はとても違います。自然と共存して、働いて、皆と経過を分け合うアフリカ人に西洋の自然との戦い、利益を自分のために貯めていくのは、極端な話になります。輪廻に基づくそれぞれの社会の役割分担のアフリカと学歴の社会、または経済力や軍事力の西洋の

物の見方は余りにも合わないと思います。日本はそんなに古い昔ではないときでもこのアフリカのやり方に似ていましたが、近代化のせいで西洋化されてしまいました。

アフリカもこの近代化、西洋化の現象に深く取り込まれています。違うところは、日本は一生懸命西洋化しようという意識が最初からあって、アフリカの方はその意識がはつきりしていない、特に七〇・九〇%の田舎に住んでいる人達は、多分この意識が深く入っていないことから、アフリカの近代化が内的なものでなく、外的なものとして、うまくいっていない一つの理由だと思います。

私にとって、西洋の文化とアフリカの文化の戦いは、まだ長い時間がかかると思いますが、今のままでは、西洋の文化が勝つことはまちがいない。けれども西洋の文化は完全にアフリカ人を取り込めないと思います。

ここでは価値観で文化を比べるつもりはありません。それぞれの民族に一番合う文化があります。別の価値観で評価しようと思ういろいろな問題、誤解が生まれます。でも、歴史を見ると違う文化の人々が接触すると、お互いから学び、それぞれの物の見方を豊かにしていきます。

の知恵、それらを一緒にした文化。

ただ戦争のない世界平和ではなくて、全ての人々に豊かで幸せな生活が出来る、深い友好関係のある世界になるために、この講演が貢献できれば幸いです。

世界平和と国際交流を深めるために、アフリカ人からみたアフリカの文化を日本の方々に紹介する機会を私に与えてくださった東洋哲学研究所に深く感謝いたします。

参考文献

1. Hountondji, P.I., *African Philosophy: Myth and Reality*, Hutchinson Ltd., London, 1983
2. Mbiti, J.S., *African Religions and Philosophy*, Morrison & Gibb Ltd., London, 1969
3. Mowoe, J.J., and Bjornson R., *Africa and the West*, Greenwood Press, New York, 1986
4. Thairu, K., *The African Civilization*, East African Literature Bureau, Nairobi, 1975
5. Sanga, N.K., *Kitane, the Hunter*, Chuo Shuppan, Nagoya, 1989

した。文化は生きているものだと思います。

私達は二十一世紀に入ろうとしているところです。国際的な文化の二十一世紀になると思います。でもその時代には国際文化というものはどの文化になるのでしょうか？ 今の世界中に広がってきた西洋文化ですか？ それとも、いま一生懸命世界に広げようとしている現代日本の文化ですか？ 私はこの二つの文化には技術のすばらしさ、生産力の高いことについてはとても感動するけれども、人間関係や、人間と自然関係に関しては貧しい文化だと思います。人間と自然を犠牲にして、自分の利益、自分の幸せを作るということは人間的な行動ではないと思います。

ですから、二十一世紀の国際的な文化は、完全に西洋の文化でもないし、東洋の文化でもないと思います。出来れば、世界のそれぞれの文化の互いの長所を学び合い、お互いの理解が出来、もっと人間的な幸福、世界平和が出来するような文化を生み出さなければなりません。例えば、西洋的な科学・技術に、東洋的な勤勉さ、熟練と自然の知識に、アフリカの心の暖かさ人間と自然の共存

〔本稿は一九九一年三月十五日、当研究所主催で開催された公開講演会「アフリカの民族と文化」での講演を収録したものである〕

（ザイール国立キンシャサ大学教授、創価大学アフリカ研究センター研究員）